

Title	書かれざる政治学あるいはフランシス・ベーコンの方法
Sub Title	Unwritten politics or Francis Bacon's method
Author	菊池, 理夫(Kikuchi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.2 (1981. 2) ,p.22- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810215-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書かれざる政治学

あるいはフランシス・ベーコンの方法

菊池理夫

1

本稿は筆者のルネサンス・ヒューマニズム研究の一環として書かれ、そのためフランシス・ベーコンの思想のごく一部を扱うものにすぎない。ベーコンはルネサンス・ヒューマニズム運動の中で独自の地位を占め、ある意味ではルネサンス・ヒューマニズムは彼によつて一つの終焉をむかえるとともに、ある意味では新たな開始をむかえると思われる。

ベーコンは伝統的に近代科学の創設者の一人に数えられてきた。しかし、近年このような見解にいくたの疑問が提出されている。つまり、彼は科学における数学のもつ意義を過少評価し、新たな科学的発見をしたわけでもなく、彼の帰納法も科学の方法としては不十分なものであると。むしろ、ガリレオの数量的自然観やデカルトの仮説・演繹法の方が近代科学成立に対してより生産的であると、しばしば説かれている。たしかに、近代科学への彼の貢献は無条件に認められないことは事実である。しかし、ベーコンをルネサンスの伝統の中、つまり魔術的哲学やヒューマニズムの学問論の中に正當に位置づ

け、彼の思想のもつ意味をさぐることによつて、彼の学問上の功績を探究する傾向も一方では強まつてゐる。

ところで、近代科学成立に対する評価がわかれるように、政治学に対する貢献の点でも見解がわかれてゐる。たとえば、G・P・グーチは「哲学では開拓者であつたのに対して、政治については反動主義者でないにしても保守主義者であつた」といふ⁽²⁾。これに対して、W・H・グリーンリーフは「ベーコンは実際、最初の偉大な功利主義者であつて、それはこの国が生み出した、近代的様式における科学と政治学の最初の偉大な哲学者であつたからである」といふ⁽³⁾。ベーコンの政治思想はJ・W・アレンによれば「全く単なる非体系的な日和見主義」であつて、多くは時宜的な政策論にすぎぬものであり、そこには政府の理論はあつても、国家の理論はない⁽⁴⁾。おそらく、彼の政治思想は簡単にいえば、国王の大権と臣下の自由のバランスをはかつた点 (Balanced government) で伝統的であり、その中で大権の方を政治的安定のために重視した点 (Paternistic absolutism) で新しいものといえるかもしれない⁽⁵⁾。しかし、彼は主権の理論を明確化するまでにはいたつていない⁽⁶⁾。つまり、ベーコンには政治思想はあつても、政治哲学はないことになる。しかし、H・B・ホワイトによれば、ベーコンにおいても政治哲学 (ホワイトの用語では、^{レコグニツト}政治学) から区別される^{ディンク}真の政治学^イは存在し、それは特に『ニュー・アトランティス』や『古代人の知恵』の中に隠されており、象徴や寓話の解釈によつて解明できるといふ⁽⁷⁾。いずれにしても、彼の政治学を評価するためには、その内容よりもむしろ方法をまず問題とする必要があると思われ。

本稿は彼の政治思想ないしは政治哲学を直接の対象とはしない。それは彼が政治について何を言つたかよりも、何を言おうとしたか、またどのようにして言つたかの方が、私には重要だと思われるからである。この点で彼の方法論が以下において直接の対象となる。しかし、それは彼の方法が無条件で近代的ないしは科学的であると考えからではなく、むしろ、それは当時の学問、つまりヒューマニズムとの関連で再評価すべき問題——私が追求しているレトリックと政治の関係の明らかにすることができると考えるからである。そのため、本稿はP・ロッシ等によつて追求されている、当時の学問論の中で

ベーコンの思想を再評価する傾向と重なっている。⁽⁸⁾ただ、そのような試みは、私の知る限り、政治学との関連では本格的になされていまいと思われぬ。

- (1) 近年、F・イエーツ等を中心にして、ルネサンス文化における魔術的伝統が、近代科学との関連でも再評価されている。ベーコンにおいても魔術との関係はそれ自体重要なテーマであるが、本稿ではその面は切り捨てられ、ヒューマニズムとの関係が中心となる。この点でも最初にことわつたように、本稿は一面的なものとならざるをえない。
- (2) G・P・グーチ『イギリス政治思想』掘巻彦、升味準之輔訳(岩波書店、一九五三年)一三頁。
- (3) W. H. Greenleaf, *Order, Empiricism and Politics* (Oxford, 1964) p.207.
- (4) J. W. Allen, *English Political Thought 1603-1660* (London, 1938) vol. I, pp.50-62.
- (5) Cf. M. A. Judson, *The Crisis of the Constitution* (New York, 1964) pp. 168-170; J. J. Epstein, *Francis Bacon, a Political Biography* (Athens, Ohio, 1977) pp. 166ff.
- (6) Cf. Judson, *op. cit.*, p. 170; G.H. Sabine, *A History of Political Theory* (London, 1963 (3rd ed.)) pp. 52, 62.
- (7) H. B. White, *Peace among the Willows; The Political Philosophy of Francis Bacon* (The Hague, 1968). 従来『ニター・トランティス』は政治について述べる前に終つた未完の作品であるとわかれてきたが、ホワイトやJ. Weinberger, "Science and Rule in Bacon's *Utopia*," *APSA*, vol. 70 (1976), 865-885 は『ニュー・アトランティス』における象徴の解釈を通して、ベーコンの政治哲学を抽出している。彼らの結論については私は必ずしも満足してゐないが、この点についても充分なことを述べるまでの準備はできていない。ただ、私はここではベーコンがなぜ象徴や寓話を通して政治について語つたかを若干問題とした。
- (8) P・ロッキ『魔術から科学へ』前田達郎訳(サイマル出版会、一九七〇年)。外にL. Jardine, *Francis Bacon; Discovery and the Art of Discourse* (London, 1974) も有益であつた。

2

ベーコンは従来の論理学の不毛性を攻撃し、科学的発見のための新しい方法——帰納法を提出し、あらゆる学問を改革しようとした。このことは周知のことであり、彼の功績として帰納法のみを強調するのは誤りであり、⁽¹⁾また彼の帰納法自体アリストテレスに認められるという主張もあるが、以下の理解のために、簡単にまとめておきたい。⁽²⁾ベーコンによれば従来の

論理学⁽⁴⁾、特に三段論法は自然学⁽⁵⁾に全く適用できないものである。というのも、それはただ議論のためのものであつて、「自然の解明」をめざすものではないからである。その原理⁽⁵⁾ (axioma) = 一般的命題の発見はアリストテレスのいうように通念 (opinio) に依存し、中間の命題も三段論法によつては演繹できない。そこで用いられる言語、概念は不正確なものであり、その結論も蓋然的なものにすぎないからである。証明の順序でも感覚と個別的なものから一挙に最も一般的な命題へと飛躍し、そこから中間の命題を引き出す演繹法では自然の複雑さを把握できない。一方、従来の帰納法も単純枚挙によつて原理、命題を発見するものであり、反証 = 矛盾的事例を全く考慮しない不十分なものである。これに対して、彼のいう帰納法は何よりも技術の発見をもたらすためのものである。それは一般的命題も、中間の命題も発見し、証明するために用いられ、その結論は必然的なものである。それは感覚から出発するが、先入観、つまりイドラを排し、感覚の補助手段として実験を用い、低次の一般的命題、高次の一般的命題へと根気よく順々にすすむものであり、しかも最後の一般的命題も全く観念的、抽象的なものではない。そして、このようにして得られた命題から新たな実験が生み出されていく。

このような方法はベーコンによれば、自然学以外にも適用されるものであるが、同時に彼は政治学をも含む「通常学」(scientiae populares) では、従来の論理学も有効であるという。自然学以外では原理は通念や「とりきめ」に基づくものであり、その原理自体に対しては理性を適用できない。ただ、その原理にしたがつて何が正しいかに関しては理性を適用できるという。したがつて、このような学問では原理からの演繹法 = 三段論法が適している。そこで用いられる言葉も「とりきめ」に基づく「通常観念」である。それゆえに「一般に行われている論理学 (dialectica) は社会生活 (civilia) や談話 (sermo) と通念をもとにする技術には正しく用いられる⁽⁶⁾」。ベーコンは決してデカルトのように古い学問をすべて放逐し、新しい原理によつて新たな学問を構築しようとはしなかつた。この点で、我々は彼の方法をルネサンス・ヒューマニストの学問論と比較することによつて、その意味を明らかにすることができると思われる。確かに、ベーコンはその関心を自然にむけ、実

験に基づく新たな発見を強調した時に、ルネサンス・ヒューマンイズムの伝統と一線を画したのである。しかし、このことは決して単純にルネサンス・ヒューマンイズムが彼において否定されたことを意味せず、それはもちろん科学論理と区別された普通論理においてそうであるばかりでなく、彼の科学論理そのものにもその影響が認められるからである。

ルネサンス・ヒューマンイズムとは何よりも学問のカリキュラム改革をめざす教育的、文化的な運動であり、その背景には古代からのレトリック的伝統があることを私はすでに指摘しておいた。そのさい、特にここで強調したのは、レトリックは多くのヒューマンリストにとつて、現在のようにもつぱらスタイルに関する理論だけであつたのではなく、論理学も含むものであつたことである。事実、ヨーロッパの論理学は少くとも一七世紀初頭までは弁証法とレトリックに密接に関連していた。そのため、ヒューマンリストがスコラ論理学を不毛なものとして攻撃した時、ヒューマンイズムは当然、論理学の改革をめざす運動となつた。最近の種々の研究が明らかにしているように、ヴァッラ、アグリコラ、ヴィヴェス、メランヒトン、ラムス等のヒューマンリスト弁証法家は論理学を形而上学的議論から引き離し、教育の場や実生活における実用性を強調して、簡便な学問、教育の方法を探究した。そのさい、彼らは命題の論証よりも議論のための素材の収集である「発見」(inventio)を強調している。これはN・W・ギルバートによれば「キケロ的レトリック的傾向」と呼ばれるものである。たとえば、アグリコラは議論においては人を信じこませることが重要であり、それは豊富に、貯えられた蓋然的「発見」を工夫することによつて行われ、このことは社会問題(Civiles questionae)においても有益であり、また「教育は有益性によつて判定される」という。彼によれば、現在の弁証法は「発見」を充分に扱つておらず、「発見の部分を判断の部分に移し」ており、そのため混乱したものとなつている。ヒューマンリストはアリストテレスの著作では厳密な論証を扱つた『分析論後書』よりも主題の「発見」を扱つた『トピカ』を重視する。アリストテレスによれば、トピカとは通念に基づく蓋然的問題を議論する弁証法において用いられる場所を見つけるためのものであり、すべての学問の最初の諸原理を発見す

るのに有益となるものである⁽¹²⁾。そのトポスは定義、特有性、類、付帯性に関するものに分類される。アリストテレスのトピカはローマにおいて、キケロによつて、レトリックの△発見√とはつきり結びつくようになる。キケロによれば、すべての議論の方法は発見と判断とにわけられるが、ストア派は「より有益で、確かに自然の順序では先に置かれるトピカと呼ばれる発見の術を全く無視している」⁽¹³⁾。

ところで、アリストテレスは『弁論術』^(レトリック)ではトポスをすべての学問に共通であるトポス(コモンブレイス)と特定の学問に固有なトポスとに区分している⁽¹⁴⁾。そして、コモンブレイスは四つの表題、つまり、一、可能と不可能、二、過去と未来、三、大小、四、敷衍と縮少に分類できるといふ⁽¹⁵⁾。しかし、コモンブレイスにはこれと別の意味があり、それはJ・M・レヒナーによれば「短い弁論」あるいは「弁論の中の弁論」を意味し、その内容は文飾を用いて徳を敷衍し、悪徳を縮少するものである⁽¹⁶⁾。つまり、アリストテレスの四にあたるものと考えられる。しかし、後期ルネサンスになるとコモンブレイスはアリストテレス的なカテゴリーや属性と類似したカタログであるよりも、現在のトピックの意味に近い具体的な表題、たとえば徳、政府、園芸等も意味するようになり、このコモンブレイスを古代の作家の著作から収集して本にまとめること(コモンブレイス・ブック)が教育における重要な手段となり、演習のための素材を提供するものとなつた。かくして、コモンブレイスは自由な発想を助けるものであるよりも、固定化された表現や内容の一覧表にすぎなくなり、現在使われるコモンブレイス(常套句)の意味となつていつた。

さて、ペーコンは論理学を一、探究あるいは発見、二、検証あるいは判断、三、保管あるいは記憶、四、表現あるいは伝達に分類する⁽¹⁷⁾。この区分自体、ロッシが指摘しているように⁽¹⁸⁾、レトリックの伝統的五部門と対応している。伝統的レトリックの理論によれば、レトリックはa、発見、b、配置あるいは判断、c、表現、d、記憶、e、伝達とにわかれる。ペーコンの四はレトリックの分類のcとeとにあたるものを含んでいる点をのぞけば、ほぼこの五部門に対応している。また、彼

の区分は、当時アリストテレス論理学の改革をくわだて、圧倒的な影響力をもつたペトルス・ラムスの区分の影響も認められるという。ラムスによれば、論理学は弁証法とレトリックにわかれ、前者に発見と判断、後者に表現と演述が割り当てられる。つまり、これは記憶を除外している点をのぞけば、ベーコンの区分に対応する。ただ、ラムスにおいてはレトリックはもつばら表現に関する術にすぎなくなつたのに対して、ベーコンにおいては後に述べるようにレトリックは単にそれにとどまらない伝統的要素を強くもつている。⁽²⁰⁾

いずれにしても、ヒューマニストによつて△発見▽が強調され、判断の先に置かれたことは、ベーコンにおいても継承されている。彼は論理学においては素材(*syva=materialia*)の収集が先になされなければ、詭弁におちいるという。⁽²¹⁾この森(*syva*)はギリシャ・ローマにおいて、またルネサンス期にも△発見▽の素材の象徴として用いられていた。⁽²²⁾この点でベーコンが自然史の収集の著作を△森の中の森▽と呼んだこと、彼にとつて自然とは経験の森であり、それに道をつけることが、方法であること、⁽²³⁾つまり、後にも述べるように、彼の自然研究はトピカの方法の適用であることに注目すべきである。また、彼の有名な比喻である、蜜蜂、蟻、蜘蛛の比較もトピカの伝統との関連でとらえることができる。彼によれば経験派は蟻のようなものであり、素材を集めて、消費するだけである。独断派は自分自分で巣をつくる蜘蛛のようなものである。これに対して蜜蜂は両方の機能を行うものであり、これが真の哲学者である。⁽²⁴⁾蜜蜂は当時、弁論の素材を集め、新しい弁論を生み出していく象徴として一般に用いられていた。⁽²⁵⁾ただ、ベーコンの比喻において一層強調されているのは単に集めるだけでなく、素材を作りかえ、新たな発見へといたることである。

このことは、彼の発見についての議論を見れば一層はつきりする。彼は発見を二つに分類し、一つは技術と知識(*scientia*)に、一つは議論と談話に関するものであるという。⁽²⁶⁾後者は本来発見の名に価しない既知の素材の△発見▽にすぎないものである。⁽²⁷⁾一方、前者は現在我々がいう発見ないしは発明である。この発見のための方法が彼のいう帰納法である。彼は当時の

技術的發明、印刷術、火薬、羅針盤がいかに人間生活に根本的な影響を与えたか、また技術的發明家はいかに古代において神としてあがめられていたかを再三にわたつて強調している。⁽²⁸⁾彼の学問の意図は、従来単に偶然にゆだねられていた技術的発見を有効で組織的な方法によつて行ふことで、人類を自然の力から解放することであつたことは、ここで特に指摘するまでもなからう。

ところで、後者の△発見▽は貯蔵庫 (Promtuarie) とトピカに分類される。⁽²⁹⁾貯蔵庫とはレトリックでいうコモンプレイスであり、よく議論される素材をあらかじめ構成しておき、実際の使用のために貯えておくことである。それはほとんど知識の一部とはいえないが、実際の弁論において有効なものである。これに対してトピカとは単に素材の収集だけでなく、そこから新しい知識を作り出していくものである。それは単に問題を示唆し、想起させるだけでなく、何を探究すべきかをも教えるものである。「賢明な設問はほとんど半分の知識である」。⁽³⁰⁾このトピカは一般的なものと特殊なものにわけられる。一般的なものはアリストテレスのいうコモンプレイスであり、ペーコンでは形而上学と区別される、すべての学問に共通の第一哲学に属する「本質の外的な条件」(大小、異同、可能・不可能等)をさすように思われるが、従来は単に論理的に扱つていただけであり、事物そのものの研究へと応用していくべきであるといふ。⁽³¹⁾また、特殊なトピカも自然学へと適用しており、その例として物体の軽重の議論をあげている。⁽³²⁾

ところで、レトリックの△発見▽においては素材を蓄積しておくための補助として記憶術が用いられていた。⁽³³⁾ペーコンも発見と記憶との関係が密接なことを説き、当時の学校教育の欠陥として△発見▽と記憶が分離していることをあげている。つまり、当時の△発見▽があまりに固定化されていること(すでに述べた貯蔵庫と、逆に弁論においてそれが全く即席のものであり、記憶に蓄積されたコモンプレイスを使用していないことを批判し、そのため実生活や行動には役立たないものとなつていくといふ。⁽³⁴⁾記憶の補助として、書き物があるが、その中にはコモンプレイス・ブックもふくまれる。彼は当時のコモ

ンプレイス・ブックが単なる教育だけのものであり、実生活と行動に役立たぬことには批判的であるが、自然学以外における有効性も説いている。⁽³⁵⁾ また、記憶そのものとしては、一、予知、二、象徴をあげ、一は「無限の探究を切りつめること」であり、具体的な場所 (Loc) に記憶するものを順序よく結びつけることをいう。二は知的な概念を、感覚的な映像に置きかえることである。⁽³⁶⁾ この記憶は自然学にも適用される。つまり、記憶は自然史を整理し、順序よく配置するためのものである。それは事例表を作ることによつてなされる。⁽³⁷⁾ この事例表もトピカの方法の適用に外ならない。⁽³⁸⁾

さて、このようにして発見され、記憶に蓄積された知識は、判断、証明を経て伝達される。ただ、彼のいう帰納法においては発見と判断は同じ方法をとる。⁽³⁹⁾ そして、判断をまどわすものとして、彼のイドラ論があるが、それは周知のことと思われるので、ここでは省略する。伝達については三つに分類されている。一、談話の機関、二、談話の方法、三、談話の例証あるいは装飾であり、一には文法が含まれ、三はつまりレトリックである。⁽⁴⁰⁾

ベーコンは確かに当時の学問がいかに言葉だけの議論に終始し、不毛なものであるかを批判し、言語よりも自然そのものを探究すべきであることを強調している。しかし、彼は単に知識の獲得だけでなく、その伝達に対してもかなりの関心をよせている。彼にとつて、知識の伝達の機関である言語は一般人のために作られ、用いられるために不正確なものである。⁽⁴¹⁾ そのため、数学者の知恵をまねて、正確な定義によつて論争を秩序づける方がよいという。⁽⁴²⁾ しかし、ベーコンは定義に対して絶対的な信頼をよせていない。というのも「定義そのものも言語からできていて、言語は言語を生み出すからである」⁽⁴³⁾。実際、彼は幾何学的な厳密な定義づけを行わず、それは最後目標として置かれているだけである。彼はそれよりも言語以外の伝達手段に興味をよせ、それを「事物の符号」と呼んでいる。たとえば、象形文字や身ぶりや、漢字のような実物符号であり、言語だけが唯一の伝達手段ではないという。⁽⁴⁴⁾

このように、ベーコンにおいて特に自然研究のさいの言語に対する不信感根強いものであるが、しかし他方では、彼は

自然に対する論理と人間の生活世界における論理とを区別しており、日常生活と人間の行動では英知 (sapientia) よりも雄弁 (eloquentia) が有効であるという。⁽⁴⁵⁾ また「人間は談話によつて社会化される」⁽⁴⁶⁾。当時の人々にとつて英知とは哲学を意味し、雄弁とはレトリックに外ならない。そして、ルネッサンス・ヒューマニストの多くは「英知と雄弁の結合」を追求したのである。⁽⁴⁷⁾ ベーコンは確かに当時のヒューマニズムに対しては批判的である。彼はそれを「虚飾と虚弱の学問」と呼び、内容よりも言葉の美しさを追求するものとして攻撃している。⁽⁴⁸⁾ しかし、彼のヒューマニズム批判は「論争的な学問」——スコラ哲学批判よりも激しくない。「実際、事物の尊厳は言葉の涵養よりもすぐれているが、それと反対に空虚な言葉よりも空虚な事物の方がいやしまれる」⁽⁴⁹⁾。また、彼のヒューマニズム批判は、当時のヒューマニズムのもつ傾向、キケロ主義やラムス主義へむけられたものと解することができる。

当時のイギリスにはレトリックに関して大別すると二つの傾向があり、一は古典主義的傾向、二は文体論的傾向であるといわれる。⁽⁵¹⁾ 一はすでに述べた五つの古典的区分をふくみ、レトリックと論理学との密接な関連を維持しているものである。二はラムス主義に見られるように、レトリックを文体および伝達に限定するものであり、我々が現在普通に使うレトリックの意味に近いものである。ベーコンはレトリックを「伝達の例証」とし、装飾のためのものとする点で二に近いように思われるが、彼のレトリックと論理学の間には本質的な相違はない。論理学は理性そのものを扱うのに対して、レトリックは大衆の通念に基づく理性を扱う点において異なるだけである。⁽⁵²⁾ 両方とも「諸技術のうちでもつとも重みのあるものであり、技術の中の技術である」⁽⁵³⁾。

彼によれば、レトリックの任務は何よりも欲望と意志を駆り立て、行動を引き起こすために、理性の命令を想像力に伝達することである。それゆえに、レトリックの目的は想像力を観察と映像とによつて満たすことによつて、理性を補助することである。⁽⁵⁴⁾ この想像力は人間の行動において重要な役割を果たす。事物の映像はまず感覚に受理され、想像力に送られ、理

性によつて判断され、選択される。それが、また想像力に送りかえされ、行動に駆り立てるものとなる。そのため、想像力は判断(理性)と行動(意志)の両方の道具となるものであり、真実と正しい行動の両方に関するものである。しかし、想像力はたんなる理性の使者だけではなく、詩、宗教、レトリックにおいてはむしろ中心的役割を果す⁽⁵⁵⁾。

確かに「想像力はほとんど知識を生み出すことはなく」⁽⁵⁶⁾、自然の研究においては事物の映像をそのままうけとることが要請される⁽⁵⁷⁾。しかし、知識の伝達においては想像力は少なからぬ働きをし、それゆえ彼の伝達の方法はレトリック的といつてよいものである。彼は知識の評価は、大衆、君主、半解な学者によつて行われるので、コモン・センスに基礎づけられ、想像力を満たすものがよく受けとられ、それは雄弁による以外は困難であるという。彼は伝達の方法に関する議論の最初で、ラムスの「一つにして唯一の方法」を批判している⁽⁵⁹⁾。ラムスの「方法」は論理学のうちの配置に属するものであり、最も判明なもの、最も一般的なもの、最も周知のものから出発する演繹法である⁽⁶⁰⁾。これに対して、ベーコンの方法はレトリックが聴衆によつてその証明を変えらるべきであるように、受け手によつて異なるものである。つまり、新しい発見の伝達と既知のものの伝達は異なっている。帰納法によつて獲得され、大衆の通念を越えた知識は「ほめかされ」(insinuate)、直喩や陰喩によつて伝達する必要があるという⁽⁶¹⁾。それは大衆から知識の秘密を隠すという密教的(acromatic)理由からであるが、また逆に、知性の対象を感性の対象の形式で示すことによつてより直接的な理解を与えるためでもある⁽⁶²⁾。この点ではすでに述べたように、彼の記憶の象徴が知的な概念を感覚的な映像に置きかえることであり、また彼の帰納法も感覚の働きを最大限に利用するものであつたことを想起すべきである。ところで、彼は「学問の揺籃期や粗野な時代では、現在平凡でありきたりのものとなつているものが、新しく未知なものであつたため、世界は寓話や直喩に満ちていた」という⁽⁶³⁾。つまり、彼の伝達の方法はレトリックの文飾をその本来の役割へと活性化し、未知のものを語るものとして、科学的伝達へも適用しているのである。また、彼は少数の原理と観察から完全な形式的技術を作り出す体系的「方法」よりも、観察をそのまま記し、自

然や日常生活における行動の複雑さに対応し、新たな研究を推進していく開かれた方法としてのアフォリズムをすぐれたものとする⁽⁶⁵⁾。アフォリズムは問題解決のための提示の方法であり、体系的なものではない点において、彼のトピカ論とも関連するであろう。

ところで、レトリックはすでに述べたように大衆の理性に関するものであり、行動へと駆り立てるためのものである。彼は徳をただ抽象的原理によつてのみ教え、人間の想像力と意志に何の同情も示さなかつたストア派はキケロによつて正当にもあざけられたという⁽⁶⁶⁾。また「プラトンとアリストテレスの道徳学は高く評価されている。しかし、タキトゥスの方がより生き生きとした道徳的観察に満ちている」という⁽⁶⁷⁾。ペーコンによれば、従来の道徳哲学の欠陥は、何が善、徳、義務、幸福等であるかを抽象的に論じるだけであり、いかにして、人間を行動へ駆り立てるか(彼はこれを「精神の耕作」と呼ぶ)については全く不十分な点にある。彼にとつて倫理学は理性よりも意志に関するものであり、欲望・感情によつて行動へと駆り立てるものである。従来の倫理学がこの点を無視しているのは、日常生活における人間の行為を軽視しているからである。つまり、哲学者は人間の精神をあまりに統一的、調和的に考え、社会生活におけるそれを無視しているからである⁽⁶⁸⁾。人間の性格や感情の研究では、レトリックや詩や歴史の方が哲学書よりも有益である⁽⁶⁹⁾。また、哲学よりも歴史は行動に結びつくものであつて、人を動かすのによいという⁽⁷⁰⁾。レトリックの働きは徳と善を可視化することにある⁽⁷¹⁾。このようにして、レトリックは生活世界における論理であり、行動に関するものである。そのため、彼はアリストテレスがレトリックを論理学と倫理学あるいは政治学の中間に置いたのは正しいという⁽⁷²⁾。

(1) B・フアリントン『フランシス・ペイコン』松川七郎、中村恒矩訳(岩波書店、一九六八年)二二〇頁参照。

(2) R. E. Larsen, "The Aristotelianism of Bacon's *Novum Organum*," *Journal of the History of Ideas*, vol. 23 (1963), p. 440.

(3) 以下のヘーコンの帰納法は『学問の進歩』(Aと略記)、『学問の尊厳と進歩』(Dと略記)、『ヘンリット・オルガヌム』(Zと略記)を中心として要約したものである。ヘーコンの作品の引用は、Ed. J. Speeding, R. L. Ellis & D. D. Heath, *The Works of Francis Bacon*, 7 vols.

- (London, 1858-1861 [rep. Statgard, 1963]) (Works 全略記) v Ed. J. Speeding, *The Letters and Life of Francis Bacon*, 7 vols. (London, 1861-1874 [rep. Statgard, 1963]) (ロロ全略記) から採るが、NOは巻数とマンキリスの番号、Aは一般に用いられているM・A・マイントンの章節の表示でしたがつてあり、頁数を知てくれるものではない。また、DAはWorks 第一巻のマイン語の頁数を知てくれる。その他の作品はWorksの巻数と頁数のみを記した。なお、『世界の大思想』ベーコン(河出書房、一九六六年)の邦訳をよびB. Farrington, *The Philosophy of Francis Bacon* (London, 1964) 所収の全集では翻訳されておらず三つの作品の英訳も参照した。
- (4) ベーコンは論理学(logica)と弁証法(dialectica)を同義に用いており、アリストテレスの厳密な論理と通念に基づく弁証法の区分が失われているが、これは当時スコトローピスト弁証法家としての一般的な慣りであった。
- (5) axiomaを数学の公理の意味であり、命題と同義語に用いることは、キケロやアントルヌ・ヤムスに於いても認められるところ。
- (6) Works I, 129. Cf. DA, 641, 683, 832-833; AL, 2-14-3, 2-16-3, 2-25-5; NO, I, passim; Works III, 89, 599.
- (7) 拙稿「レトリカと政治——ルネサンス・スコトローピストの政治思想」『風稿』一九八〇年 四月、五八—七七頁参照。
- (8) 上記(6)の外にN. W. Gilbert, *Renaissance Concept of Method* (New York, 1930); W. S. Howell, *Logic and Rhetoric in England 1500-1700* (New York, 1961); W. Ong, *Ramus: Method and the Decay of Dialogue* (Cambridge, Mass, 1958); C. Vasoli, *La dialettica e la retorica dell' Umanesimo* (Milano, 1938) 等を参照。なお、ロマン『前掲書(10—13頁)』と著者トマス・ヴァソリの著述を参照。
- (9) Gilbert, *op. cit.*, p. 76.
- (10) R. Agricola, *De Inventione Dialectica* (Köln, 1523 [rep. Frankfurt, 1967]), pp. 1-3, 181-182, 222-223.
- (11) *Ibid.*, pp. 179-181.
- (12) 『トマス』100a-b。
- (13) *Topica*, II, 6.
- (14) 『弁論術』一三五八a。
- (15) 同上、一三九1a以下。
- (16) J. M. Lechner, *Renaissance Concepts of the Commonplaces* (New York, 1962 [rep. 1974]), pp. 2ff. 以下ロキントマンと同様に記述は口の本に負いふものが大である。
- (17) DA, 616; AL, 2-12-3.
- (18) ロッシ『前掲書』一八〇—一八三頁。
- (19) ただし、逆にラムスの弁証法自体、きわめてレトリカルなものであるとされる(Cf. Ong, *op. cit.*, passim)。

- (8) ユーロンのスタイルの組織と図について 10 組(∞) 2 組(∞) のことで K. R. Wallace, *Francis Bacon on Communication & Rhetoric* (Chapel Hill, 1943); J. Stephens, *Francis Bacon and the Style of Science* (Chicago, 1975) を参照。
- (12) DA, 490; AL, 2-pref-12.
- (22) Cf. Ong, *op. cit.*, pp. 118-119.
- (23) Cf. Works I, 129; NO, 1-82.
- (24) NO, 1-95; Works III, 583, 616.
- (25) Cf. Lechner, *op. cit.*, pp. 137 ff. 2-4-2547 ハルケウス「生徒はたゞ蜜蜂のやうに蜂箱のなかにて文字のすくいの圃を飛ち回らば、すくいの花とて、類を養ふ。養蜂の蜂は蜂のうさへに (Erasmus, *De Copia in Collected Works*, vol. 24 (Toronto, 1978), p. 639)。
- (29) DA, 617; AL, 2-13-2.
- (29) DA, 633; AL, 2-13-6.
- (30) Cf. NO, 1-129; DA, 470; AL, 1-7-1; Works III, 223, 610-611.
- (32) DA, 634. 4-1 (11・13・14) に於てユカは神の「示唆」を受けられたとだけ述べておる。A上を増補したラテン語訳のあるDAとはユカを「ト」に於てユカは神の「示唆」を受けられたと述べておる。なほ「表」の語句としての政治学上の論議をユカに求めらる W. Hennis, *Politik und praktische Philosophie* (Neuwied am Rhein, 1963) 47 の註をなすユーロンの評語について (pp. 96-100)。
- (36) DA, 635; AL, 2-13-9.
- (37) DA, 543-544, 550; AL, 2-5-2, 2-7-3.
- (38) DA, 636-639; Works II, 317-322.
- (39) 記憶論と図について F. Yates, *The Art of Memory* (Chicago, 1966) を参照せよ。
- (41) DA, 490-491; AL, 2-pref-12. Cf. Works III, 103.
- (42) DA, 647-648; AL, 2-15-1. Cf. LL, I, 25-26.
- (43) DA, 648-649; AL, 2-15-3. Cf. NO, 2-26.
- (45) NO, 2-10; Works III, 552-553.
- (48) Works I, 403. ロミン「前掲書」二四八―二五〇頁参照。
- (48) DA, 640; AL, 2-14-1.
- (49) DA, 651 ff; AL, 2-16-1 ff.
- (49) DA, 641; AL, 2-13-4; NO, 1-43; Works III, 599.

- (32) DA, 645-646; AL, 2-14-11; NO, 1-59; Works III, 599.
- (33) NO, 1-59. Cf. DA, 621; AL, 2-13-4.
- (34) DA, 652; AL, 2-16-3.
- (35) DA, 670-671; AL, 2-18-1.
- (36) NO, 1-43.
- (37) Cf. J. Siegel, *Rhetoric and Philosophy in Renaissance Humanism* (Princeton, 1968).
- (38) DA, 450-451; AL, 1-4-2-3.
- (39) DA, 452; AL, 1-4-5.
- (40) キヤロ主義とキヤロの文体、用語しか認めず、その模倣を重視する傾向ををし、ヘラスマスによつて、その形式性が批判されている。
- (41) Wallace, *op.cit.*, pp. 187 ff. ロマン、前掲書、二一八—二一九頁参照。
- (42) DA, 673; AL, 2-18-5.
- (43) DA, 490; AL, 2-pref-12.
- (44) DA, 671-672; AL, 2-18-2-4. 45 46 ヴーロンの句照を引く。K. R. Wallace, *Francis Bacon on the Nature of Man* (Ithaca, 1967) 註釋 p. 488°。
- (45) DA, 614-615; AL, 2-12-1.
- (46) DA, 615-616; AL, 2-12-1.
- (47) NO, 1-65; Works I, 145.
- (48) Works III, 503.
- (49) DA, 663. ナビゲ、マクスを引く。自然の方法と実践的な方法の区別はあり、ヘクリスに引く。ラム主義者であるテンブルは知識の獲得と探検の区別を引く。(Cf. Jurdine, *op. cit.*, pp. 59ff; Howell, *op.cit.*, pp. 194 ff.)°
- (50) *The Logike of excellent philosopher, P. Ramus Martyr* (London, 1574 [rep. 1965]), p. 94.
- (51) DA, 667; AL, 2-17-10. Cf. DA, 520-521; AL, 2-4-4. 45 46 「はるかな」はキヤロとすれば聴衆が敵対的な時を用い、(De Inventione, I, xvii, 23)°
- (52) DA, 664-665; AL, 2-17-8. Cf. DA, 520-521; AL, 2-4-4.
- (53) DA, 520; AL, 2-4-3.
- (54) DA, 667; AL, 2-17-10.

- (95) DA, 665-666; AL, 2-17-6. Cf. DA, 460; AL, 1-5-4; NO, 1-86; Works II, 593-594; W, 321.
- (96) DA, 672; AL, 2-18-3.
- (97) Works III, 538. 大塚 新徳のキヤンズ譯註に「つづけて」K. C. Schelhouse, *Tacitus in Renaissance Political Thought* (Chicago, 1976) 參照。
- (98) DA, 713 ff.; AL, 2-20-1 ff. ノトリックにおいて情念が重視されるのは伝統的であり、たとえば、ヴィヴェスは次のようにいう。「人間において最高の法律と政府は意志を自由にするものである。意志に対して理性と判断が顧問官として割り当てられ、情念はそのたがまってしまう。その上、情念は弁論の花冠で飾られて燃え立つ。その理性の弁論をよけて動かされる」(J. L. Vives, *De Trudendis Disciplinis*, trans. F. Watson (Cambridge, 1913) p. 180)。
- (99) DA, 733-736; AL, 2-22-4-6.
- (100) Works V, 18.
- (101) DA, 672; AL, 2-18-3.
- (102) DA, 673; AL, 2-18-5.

3

ペーコンは政治学も新帰納法と自然哲学をモデルにして厳密な学問として構成されうると主張している。つまり、新帰納法はたんに自然哲学だけでなく、その他の諸学、論理学、倫理学、政治学に対しても適用でき、自然史と発見表と同じものを「社会生活の実例」においても作成するといふ⁽¹⁾。そして、自然哲学が政治哲学を含む「個々の学問にまでひつぱり出され、個々の学問が自然哲学にまでひきもどされない限り、何人も諸学における進歩は期待してはならない⁽²⁾」。この『ノヴァム・オルガヌム』における「自然哲学」は『学問の尊厳と進歩』における第一哲学ではないかという議論があるが、第一哲学で扱う原理は主として数学や自然現象に認められる原理を他の厳密ではない学問へと適用するものである⁽⁴⁾。たとえば、彼がよく用いる原理は「より大きな形相を保持するものは何であれ、運動においてより強力である」というものであり、このことは自然において、鉄が特殊な共感によつて磁石の方に動くが、一定量を越えようと大地の方へむかうことに認められる。

それは倫理学や政治学においては、私的な善をめざす欲求は公共的な善をめざす欲求にうちかつことはないという原理になる。⁽⁵⁾ また「すべてのものの本性はそのもつとも小さな部分にもつともよく認められる」という原理は、自然学ではデモクリトスのアトム論に見られ、政治学ではアリストテレスが国家の本質の探究を家族から出発したことをあげている。⁽⁶⁾ さらに、自然学の原理である「事物は第一原理に還元することによつて破壊から防止できる」の適用として、マキアヴェリがいうように政治学においては、国家を破壊から防止するのは古代の様式へと改革することであるという。⁽⁷⁾ このようにして、自然哲学は「原理にもつとも還元できにくい」政治学 (scientia civilis) に原理を供給できる。⁽⁸⁾

ベーコンによれば、その基礎に自然史を置く自然哲学は、理論的なものと実践的なものとにわかれ、前者は原因の究明、実験から原理への上昇、後者は結果の産出、原理から実験への下降を意味する。そして、理論的なものは自然学と形而上学とにわかれ、自然学は質料に包まれ、変化するもの、存在と運動、質料因と作用因を扱うのに対して、形而上学は質料から離され、変化しないもの、理性と知性とイデア、形相因と目的因を扱うものである。この自然哲学の分類は、新帰納法の過程と対応するであろう。つまり、自然史—自然学—形而上学のピラミッドは感覺的、個別的なものから低次の原理を探究し、ついに質料から分離された純粋形相—法則の発見へといたる過程でもある。⁽⁹⁾

ベーコンは哲学的関心を歴史にむけた最初の一人であり、歴史哲学の基礎を作つた人間であるといわれている。⁽¹⁰⁾ 彼は人間の知性の能力によつて学問を三つに区分している。つまり、記憶に関するものとして歴史、想像力に関するものとして詩、理性に関するものとして哲学である。⁽¹¹⁾ 彼は従来の方法があまりにも経験と個別から遠く離れた一般化を行うことを批判し、すべての学問の基礎に歴史を置くことを強調している。⁽¹²⁾ 彼にとつて歴史と経験は全く同じものである。⁽¹³⁾ そして「実例と記憶によつて支持されないことはすべて偶然と誤りにしたがる」という。⁽¹⁴⁾ 歴史は大別すると、自然史と社会史にわけられ。「自然史では自然の、社会史では人間の行為と行動が扱われる」。⁽¹⁵⁾ 政治学においても、その基礎となるのは歴史であり、彼は道徳

学と同様に、政治学の研究の資料として、実例と歴史をあげている。⁽¹⁶⁾ 政治学は社会史が供給する、事件そのものと原因の説明から判断を行い、議論を組み立て、一般的な考察をめざすものであるが、⁽¹⁷⁾ その場合でも、マキアヴェリのようにあくまで実例が主で、議論が従である方が実用に適しているという。⁽¹⁸⁾ 彼の歴史はあくまですでに確立された規範を提出するためのものではなく、倫理学、政治学に対して、新たな事実を提供するためのものである。その際、重要なことは『ヘンリー七世史』に見られるように人間の行動の心理学的研究である。⁽¹⁹⁾ このようにして、歴史や実例から事例表が形成され、そこから一般的原理が構成されていくと考えていた。⁽²⁰⁾ しかし、彼は自然史と実験史においても、それらがいかに貧困であるかを自覚していたように、⁽²¹⁾ 真実で完全な社会史はまれであるという。⁽²²⁾

次に自然学であるが、これは確かに政治学と類似している。彼は政治学は「すべてのうちで資料にもつとも包みこまれ (immersus)、原理に還元できにくい主題を扱う」という。⁽²³⁾ この点でもつとも資料から離れた数学と異なり、⁽²⁴⁾ 資料に包まれた (immersus) 自然学に近いものである。⁽²⁵⁾ 自然学はすでに述べたように、変化するもの、運動を扱うのであり、資料の欲望と情念が哲学の固有の対象であるという。⁽²⁶⁾ 政治学においても、人間のうつろいややすい行動の研究が重要であり、その作用因はすでに述べたように人間の欲望、意志である。また、自然学では「自然において見出されるままの具体的な物体」⁽²⁷⁾ を対象とするように、人間の行動においても、そのあるがままの姿を対象とする。「マキアヴェリやその他の、人間はどんなことをするかをしるして、どんなことをすべきかをしるさなかつた人々に負うところが大きい」。⁽²⁸⁾ そして、自然における毒を研究する必要があるように、倫理学における悪徳を知る必要もあるという。⁽²⁹⁾ さらに、自然学の研究から目的因の追求をむしろ有害なものとして追放しているように、⁽³⁰⁾ 社会的行動においても、道徳的考慮よりも、いかにして社会の中で成功するかが重要なものとなつている。⁽³¹⁾

彼は『学問の尊厳と進歩』では政治学を三つに分類している。一、会話の学問、二、仕事の学問、三、帝国あるいは国家

の学問である。そして、この学問はすぐに実践知 (prudentia) と置きかえられている。⁽³²⁾ この分類は、現在の政治学よりも、むしろ言語活動も含む、人間の行動を基礎とした社会学の構想といつてよいであろう。また、彼は政治学を倫理学から分離し、倫理学を個人的な人間、内面的な善に関するものとし、政治学を社会的な人間、外面的な善に関するものであるとする。⁽³³⁾

一は雄弁家の行動と同様に外面的なものにかかわるものであり、会話や顔色や動作の研究から相手の行為の意味をおしはかることである。それはいわば心の衣服にあたるものであり、何よりも重要なことは、きゆうくつではなく、仕事と行動の自由を保証することである。この点は十分に研究されているが、社会的実践知として重要な役割を果すものである。⁽³⁴⁾ その研究は政治学でもレトリックでもどちらに置いてもよい。⁽³⁵⁾ 二にはさまざまな仕事における一般的な処置を教えるものと、生活における個人の昇進をめざすものがあるが、ここでも博識と実践知の一致が要請されている。⁽³⁶⁾ 後者に関して、状況に順応することと、逆に自ら工夫してことにあたる必要がある。⁽³⁷⁾ しかし、政治的行動では状況にあわせて自己を変えていくことに力点が置かれている。「運命の車輪に合わせて、精神の車輪を同心円上に、同一方向に回転させるほど政治的なことはない」。⁽³⁸⁾ また、政治においては徳それ自体よりも、それを誇示する必要がある、そのため「見せびらかし」は倫理よりも政治では悪ではないという。⁽³⁹⁾ ベーコンの政治学は確かに倫理学との直接的な結びつきを失い、自然学の応用という側面をもち、人間の性格や行動の研究によつて、後に述べるように、被治者を操縦するためのものである点で、伝統的政治学Ⅱ実践哲学を解体するものであった。⁽⁴⁰⁾ しかし、彼にとつて政治はいぜん理論知であるよりも実践知の領域であり、その点で弁証法やレトリックを適用できうるのである。

ベーコンは倫理学、政治学、法学のような「通常学」においては、従来の論理学の発見、証明でも有効であるという。その原理は通念や同意に基づくものであり、その言葉は一般人の使用する談話である。⁽⁴¹⁾ また、社会というものも權威、同意、

名声、通念に基づき、論証に基づくものではないという。⁽⁴²⁾ 政治学の原理の発見は、通念に基づくものの外に、二つの方法がある。つまり、すでに述べたように一つは自然学の原理の適用、一つは観察、歴史、実例を基礎とするものである。後者に関していえば、実例とはアリストテレスのいうように、レトリックにおける帰納法にあたるものであり、ペーコンも実例は帰納法を簡略にしたものであると述べていることにも注意すべきである。⁽⁴³⁾ また、「古い通常学」ではコモンプレイス・ブックによつて記録を整理することも有効であるという。コモンプレイスは「発見の素材 (topic) を提供し、判断の鋭さを一点に集中させる」。⁽⁴⁴⁾ ペーコンは三段論法では発見と判断の方法は異なり、判断は「媒辞を通して命題を原理に還元することに外ならない」が、媒辞は「自由な才能の鋭さ」によるという。⁽⁴⁵⁾ つまり、トピカは政治の中でも記憶を整理し、実践的判断をきたえるために有効なものであると考えられる。いずれにせよ、このような原理から新たな正しい結論を導き出すためには、人間の本性と行動の変りやすさを考慮し、原理をふるいにかけて、証明する必要がある。人間と行動に関する個別の「情報」はすべての行動に関する三段論法の小前提である。というのもしかなる観察あるいは原理（そこから政治学の大前提が導き出される）の真理あるいは卓越性は、もしも小前提に誤りがあれば、結論を保証するのに充分ではないからである。⁽⁴⁶⁾ 彼は帰納法に対するイドラ、論理学に対する詭弁に対応する、想像力によつて「理性をまるめこむ」レトリックの詭弁の一つとして「善と悪のしるし」をあげている。⁽⁴⁷⁾ 政治的弁論においては、善と悪は絶対的なものであるとともに、程度の問題としても扱うのであり、そのために純粹に理性的方法によるよりも、「ほのめかし」による説得がより力をもつという。⁽⁴⁸⁾ このことは倫理学や政治学において、「邪悪な術」を知らないことはかえつて、徳を無防備にするという主張に重なるであらう。たとえば、自分の欠点を隠すための「しるし」として、商人が自分の店の商品の値段をつりあげ、他の店の値段を下げることを学ぶべきであるというが、これは「善と悪のしるし」の詭弁、「賞讃されるものは善であり、非難されるものは悪である」の論破の例にあげられたものである。⁽⁵⁰⁾ この「善と悪のしるし」はレトリックの貯蔵庫に属するものであるが、第一哲学と政

治学にも関するものである。⁽⁵¹⁾

政治学の伝達もレトリック的であり、彼は身ぶりや寓話、比喻による政治的内容の伝達に言及している。⁽⁵²⁾ 彼にとつて、精神と身体はデカルトのように、分離されているものではなく、その間の共感について言及しているように、⁽⁵³⁾ 政治的行動は外面性に関するものであるが、すでに述べたように、相手の言葉、顔色、身ぶりの研究によつて、その内面性をさぐる事が重要なものとなつている。⁽⁵⁴⁾ また、彼はレトリックの証明と説得が聴衆に応じて異なる例として「森の中のオルフェウス、イルカたちにかこまれたアリオン」をあげている。⁽⁵⁵⁾ このオルフェウスは『古代人の知恵』では哲学の象徴であり、特に森の中のオルフェウスは、道徳、社会哲学の象徴である。オルフェウスは「人間生活に関心をむけ、人間の精神に忠告と雄弁によつて、徳と衡平をほのめかす。そして、社会をつくり、人々を一つにまとめ、法律の束縛を認めさせ、権力に服従させ、放縦な感情を忘れさせ、かくして人々は掟と法律に従順となる」⁽⁵⁶⁾。

ところで、彼は政治学の三として「帝国あるいは国家の学問」をあげていたが、この点では沈黙する必要がある⁽⁵⁷⁾。それは主として君主の秘密をかいま見ることが危険であるからであり、この点では、国王、ジェームズ一世の主張にしたがつたといえよう。⁽⁵⁹⁾ ただし、統治者の側からは、被治者のことをすべて知る必要がある⁽⁶⁰⁾。ベーコンは政治的行動においては、支配よりも操縦の方がすぐれていると主張する。「他人を自分の目的へと望むままに動かし、しかもその意味を決して教えない者が……自分の使う者達にその意味を伝える者よりも政治的思慮 (prudentia) の点で、はるかに深く、偉大である」⁽⁶¹⁾。これは自然における目的因の探究を形而上学の領域にとどめておくべきであるという文脈においていわれているのであり、政治の目的因の探究は統治者のみに依存すると考えられる。

この点で、彼の形而上学と比較する必要がある。ベーコンにとつて確かに理論と実践は不可分であり、理論は実践的成果を生み出さない限り不毛のものである。しかし、彼はいぜんとして最終的目標を、従来のものと内容が異なるにしろ、形而

上学に置いている。「成果そのものよりも、それが与える生活の便宜のゆえよりも、それが真理の保証であるかぎり、いつそう価値あるものと考えるべきである」⁽⁶²⁾。しかし、彼は個人的善に関しては、アリストテレスと同様に、観想的生活がすぐれているというものの、「この人生という劇場においては観想者であることはただ神と天使のみに許されている」⁽⁶³⁾、社会生活における実践的生活の優位を説いている。形而上学の方法では「自然学が数学において終結するときもつともよい結果を得る」という時、自然史―自然学の研究によつて得られた一般の命題が量的形式によつて述べられ、計算によつて個々の場合へ適用されると考えていたと思われる⁽⁶⁴⁾。それは物体をいわば自然のアルファベットとしての、不変、永遠、普遍的である単純本性に還元することによつて行われる⁽⁶⁵⁾。しかし、実際にはベーコンは自然史の資料の収集、事例表の作成に大きな精力をかたむけ、『ノヴム・オルガヌム』第二巻に見られるように、そこから少しだけ単純本性の探究へむかっただけである。数学を自然の探究のための出発点ではなく、その到達点へ置いたこと、また理論的仮説を十分に考慮しなかつたことは、彼の方法が近代科学の方法としては不充分であるとしばしば指摘される理由である。ところで、彼は自然哲学への数学の適用を不十分なものであるにしろ考えていたのに対し、自然哲学以外への応用については、原理の適用以外についてはほとんど述べていない。特に数学と政治学とは全く異なるものである。「伝達の方法としては数学（もつとも抽象的で、純粹な知識）と政治学（もつとも包みこまれ、複合的）とは全く別のものである」⁽⁶⁶⁾。

形而上学の対象である形相因に関して、魂の形相は、自然の事物と異なり、直接神によつて創造されたものであるので、「哲学の対象である天地の法則」にはしたがわれないという⁽⁶⁷⁾。それゆえに、政治は人間の世界であるというものの、倫理学や政治学の最終的知識は神のみに依存している⁽⁶⁹⁾。たとえば、彼は政治学における「邪悪な術」の必要性も説くが、いぜんとして「永遠の摂理と神の審判」についても語っているのである⁽⁷⁰⁾。また、彼は学問の分類の最初の方で、神から由来する神学と感覚から由来する哲学とに分け、両者を混同すべきではないという⁽⁷¹⁾。それゆえに、目的因の探究も形而上学の中にとど

まるべきである。ただし、彼は人間の行動に関しては目的因の探究も有効であるという⁽⁷²⁾。しかし、この目的因を知るべきなのはすでに述べたように統治者のみであり、それは神のような存在であり、彼は国王を第一動因と呼んでいる⁽⁷³⁾。このように彼の政治学は自然学と同様に神学的、形而上学的議論をたな上げにしたものである。論理学では判断よりも発見が強調されていることと同様に、自然学では力点が自然史の研究に置かれ、中間の命題の方が実質のある生きたものであるように⁽⁷⁴⁾、政治学でも歴史や実例やレトリック研究から得た人間の行動の観察、記録の方が重視されていた。また、政治学の根本原理は終極的に国王の権威に基づくために議論の対象とはなっていない⁽⁷⁵⁾。しかし、一方では政治は同意に基づくものであるという伝統的観念を維持しており、大衆の同意を得るには、想像力を刺激するか、通俗的概念によつて行われるという⁽⁷⁶⁾。つまり、そのための政治的な術が彼のレトリックである。レトリックは弁証法とともに人間の共同生活における論理であるが、ペーコンにおいて強調されているのは、もつぱら被治者を操縦する側面である。いずれにせよ、彼の政治学は『隨筆集』に見られるように、理性への訴え⁽⁷⁷⁾ではなく、一般的原理の獲得よりも、過去や、現在の例を導きとする政策の確保の方により関心が置かれていたといえよう。また、『古代人の知恵』に見られるように、通常の言語手段では語れざるものについては、寓話や象徴の解釈の形式を通して語っているのである。

(1) NO.1.127. ただし、同じ箇所で「探究する主題の性質と状態に応じて、発見の方法をいくぶんかえる」と述べていることにも、注意する必要がある⁹⁰。

(2) NO. 1.80. Cf. NO. 1.107; DA, 580; AL, 2.9.1; Works II, 228-229, 595; VI, 689.

(3) 花田圭介「フランシス・ペーコン研究(三)」『北海道大学文学部紀要』十五—一、一二八—一三四頁参照。

(4) DA, 540-543; AL, 2.5.3. Cf. Jurdine, *op. cit.*, pp.101 ff.

(5) DA, 541-542; AL, 2.20.7; NO, 2.48 (Works I, p. 349); Works II, 229-230.

(6) DA, 499; AL, 2.1.5.

(7) DA, 541; AL, 2.5.3. A Iでは政治学の原理が自然へ適用であるというが、DAでは逆になっている。

- (80) DA, 746 ; AL, 2-23-1.
- (81) DA, 547-571 ; AL, 2-7-1-7 ; NO, 2-2, 2-9.
- (82) Cf. L. Strauss, *The Political Philosophy of Hobbes* (Chicago, 1963), p. 86 ; J. C. Morris, "Philosophy and History in Bacon," *Journal of the History of Ideas*, vol. 38 (1977), p. 585.
- (83) DA, 494 ; AL, 2-1-1 ; Works III, 727-728.
- (84) DA, 551, 567 ; AL, 2-7-6 ; NO, 1-98.
- (85) DA, 494-495 ; Works III, 729.
- (86) DA, 504.
- (87) DA, 495 ; Works III, 728.
- (88) LL, II, 12. Cf. DA, 769 ; AL, 2-23-8.
- (89) DA, 503, 513-514 ; AL, 2-2-12.
- (90) DA, 769 ; AL, 2-23-8.
- (91) Cf. S. Clark, "Bacon's *Henry III* : A Case-study in the Science of Man," *History and Theory*, 13(1974), pp. 97-118.
- (92) DA, 500 ; AL, 2-1-6 ; NO, 2-10 ; Works I, 396 ; III, 386, 731. L. F. Dean, "Sir Francis Bacon's Theory of Civil History-Writing," in ed. B. Vickers, *Essential Articles for the Study of Francis Bacon* (Hamden, 1968), pp. 211-235 ; G. H. Nadel, "History as Psychology in Francis Bacon's Theory of History," in ed. Vickers, *op. cit.*, pp. 236-250 ; Morrison, *op. cit.*, 586-606 ; Clark, *op. cit.*, 第 157 ページ以下の自然史と社会史の目的と方法は同じであることが、彼は社会史を扱うべき最も厳密な方法を適用しようとしたのである (Cf. Jurdine, *op. cit.*, pp. 151 ff.)。この意味から、バコンが「知識としての歴史」ノートブックの文脈の中で「理解する必要がある」(Strauss, *op. cit.*, pp. 82 ff.)。
- (93) NO, 2-14.
- (94) DA, 504-505.
- (95) DA, 746 ; AL, 2-23-1.
- (96) DA, 576 ; AL, 2-8-1.
- (97) DA, 550 ; AL, 2-7-3.
- (98) Works III, 21-22. Cf. NO, 1-66, 2-48.
- (99) NO, 2-5.
- (100) DA, 729 ; AL, 2-21-9.

- (62) DA, 546-547; AL, 2-6-2.
- (63) NO, 2-2; DA, 568-571; AL, 2-7-7.
- (64) DA, 789; AL, 2-23-44-45.
- (65) DA, 746-747. 417に於て「行儀の善悪」なる語句あり。
- (66) DA, 614, 726-727, 746; AL, 2-21-6, 2-23-1.
- (67) DA, 747-749; AL, 2-23-3.
- (68) DA, 674; AL, 2-18-5.
- (69) DA, 749. Cf. AL, 2-23-4-5.
- (70) DA, 786-787; AL, 2-23-35.
- (71) DA, 784; AL, 2-23-33.
- (72) DA, 780-783; AL, 2-23-30-32.
- (73) 上・中・下ニ就いて『社會哲學論集』細谷真雄訳(未來社、一九六九年)一章參照。
- (74) DA, 621. 417に於ける論議的表現のそのとに關するニ就いて(2-13-4)。
- (75) Works I, 129. Cf. NO, 1-90; Works II, 597.
- (76) DA, 640. 上ニ就いて『牛論』135-136に參照。
- (77) DA, 647; AL, 2-15-1. 417に於ける論議的表現のそのとに關するニ就いて(2-13-4)。
- (78) DA, 640-641; AL, 2-14-1-3. 上ニ就いて『牛論』135-136に於ける論議的表現のそのとに關するニ就いて(2-13-4)。
- (79) DA, 773. Cf. AL, 2-23-14.
- (80) DA, 674-688; AL, 2-18-6.
- (81) Works III, 77.
- (82) DA, 729-730, 789-790; AL, 2-21-9; 2-23-45.
- (83) DA, 675, 781; AL, 2-18-6, 2-23-32. 417に於ける論議的表現のそのとに關するニ就いて(2-13-4)。
- (84) DA, 688.
- (85) DA, 474-475, 526, 583, 651; AL, 1-7-17, 2-9-2, 2-16-3.
- (86) DA, 580-586; AL, 2-9-1-3.
- (87) DA, 583-584, 651, 747-749, 773-774; AL, 2-9-2, 2-16-2, 2-23-3, 2-23-16.

- (45) DA, 673 ; AL, 2-18-4.
- (46) Works III, 647-648.
- (47) DA, 745-746, 792 ; AL, 2-23-47.
- (48) Cf. Works V, 645-646.
- (49) 「王権の根源と國主の職務とを論ずるは社会法に非ざらん。……神は何をなせしむるかを議論するは無神論であり、續神行論である。……」¹² 國王が何をなすべきにんぞ……繼體天皇臣政を總論するを、國主と天子の最高の御感ひあり」(Ed. C. H. McIlwaine, *The Political Works of James I* (New York, 1946), p. 333)
- (50) AL, 2-23-48. Cf. Works VI, 679.
- (51) DA, 570 ; AL, 2-7-7.
- (52) NO, 1-124. Cf. NO, 1-129.
- (53) DA, 718 ; AL, 2-20-8.
- (54) NO, 2-8. Cf. NO, 1-96 ; DA, 576-577 ; AL, 2-8-1.
- (55) Works I, 142 ; NO, 1-121, 2-8 ; DA, 565-566 ; AL, 2-7-5.
- (56) DA, 666 ; AL, 2-17-99. 尊皇を引用す。
- (57) DA, 605-606 ; AL, 2-11-1. Cf. DA, 465, 565 ; AL, 1-6-6, 2-7-5.
- (58) DA, 777 ; AL, 2-23-23.
- (59) Cf. DA, 731, 732, 739, 740, 772, 790-791 ; AL, 2-21-11, 2-23-46.
- (60) DA, 790 ; AL, 2-23-46.
- (61) DA, 539 ; AL, 2-5-1 ; Works III, 220-221, 596.
- (62) NO, 2-2. Cf. NO, 1-48.
- (63) LL, V, 211 ; Works VI, 500.
- (64) NO, 1-104 ; DA, 617 ; AL, 2-13-2.
- (65) ただし、彼は専制君主政の権威よりも、自由君主政や共和政の権威がすぐれてゐるといふ (DA, 481 ; AL, 1-8-3)。¹³ この点では、彼の王権に対する考えは二面性、つまり議論をある部分とすべきなり部分があり、彼の大権についての議論とも関連するが、それは直接政治思想に關することであるのでもうひとつは取り扱わなご。
- (66) NO, 1-17.

(77) 『隨筆集』の方法に関しては、Jurdine, *op. cit.*, pp. 227 ff. 参照。

4

ベーコンの最終的意図は自然を探究することによつて、科学の進歩を促進し、人類に新しい便宜を提供することであつた。それは人類が本来もつ力を回復し、新しい作業へとむかうものであつた。そのための方法が新帰納法であつて、そこでは何よりも新しい発見を導き出すことが強調されている。そして、政治学もこの自然科学の方法を用いて確実なものへといたるべきであることを示唆している。しかし、ベーコンは自然と社会生活との対象と方法の相違も理解していた。そのため、政治学においても従来の弁証法やレトリックのもつ機能を充分認めていた。

しかし、そればかりではない。彼の自然科学の方法そのものも、当時のルネサンス・ヒューマニストによつて述べられた弁証法—レトリックのいわば△換骨奪胎▽と呼びうるものであつた。この点はすでにロッシによつて詳細に論究されており、若干の点は二節において述べたので、ここでくりかえす必要もないであらう。ただ、そのため彼の意図にもかわらず、彼の方法は厳密な科学へと到達できるものではなかつたことを指摘できる。また、彼の認識論は心理学へ、彼の人間学、倫理学、政治学は行動科学へと移行するともいわれている。しかし、この点でも、我々は彼の新帰納法、自然学とともに、弁証法—レトリックの影響を認める必要がある。つまり、日常言語からの出発、感覚、経験—歴史の重要性、実践—行動の重視、トピカの使用、伝達等の点においてである。

ところで、このような彼の政治学の方法のもつ二面性は、ベーコン自身においてはまとまつた形での人間学、政治学を生み出すことはなかつたが、一方ではホップスへと、一方ではヴィーコへと吸収、発展されていくと考えられる。しかし、この点での論証は、本稿の課題を越えており、別の機会に譲りたいと思う。